

東成区の今と昔 そして、これから

歴史編



古代から現代までの東成区の歴史と成り立ち、
主な出来事や発展の軌跡と未来への展望

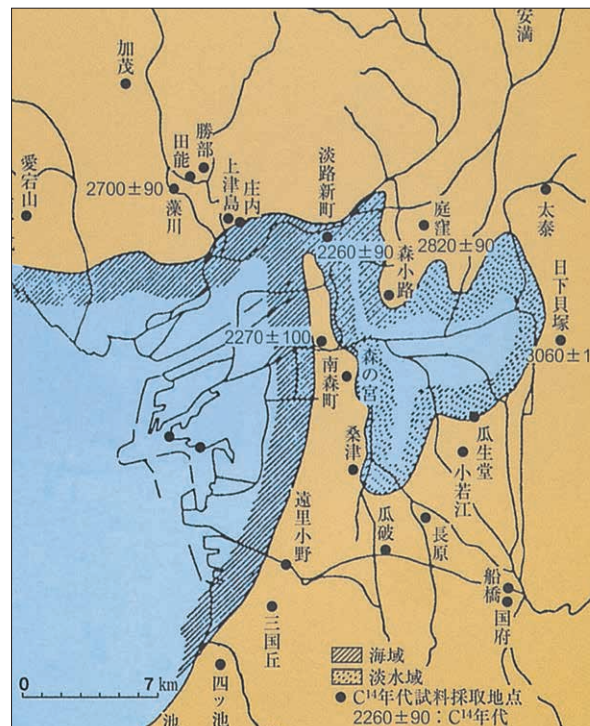
原始・古代

今から2～3,000年前の大阪は、大阪湾へ指のように突き出した半島状の地形（上町台地）で、森の宮から東は大きな入江となっていました。この入江に向かって淀川と大和川の2大水系が上流から土砂を運び、半島の東側に次第に陸地が広がって行きます。半島の東側に生まれた土地であるから東生^{ひがしなり}と呼ばれ、それが東成の地名の始まりとなっています。古墳時代の末ごろまでは、大今里辺りは入江であったことから、昭和30年（1955年）に大今里西1丁目で杭に繋がれた状態の丸太舟が発見され、また昭和41年（1966年）には地下鉄今里駅周辺の工事中に地下14メートルの深さから、カツオクジラの骨が発見されたことから知られます。

飛鳥時代に入ると日本と大陸・朝鮮半島の交流が盛んになってきます。昭和45年（1970年）町名変更が施行される以前、JR玉造駅の南側に「唐居町^{からい}」という町名があって、ここは飛鳥～奈良時代の外交施設である三韓館^{さんかんかん}（一種の迎賓館）



カツオクジラ（中央・赤いボード上）
画像提供：大阪市立自然史博物館



河内湾の時代の古地理図
（約3,000～2,000年前・縄文時代晩期～弥生時代前半）

が置かれた場所であり、日本の大陸に対する大事な玄関口であったとされています。

東成の土地は次第に東へ広がり、多くの人々によって開拓が進みましたが、ここに流れ込む水の出口は半島のずっと北の方にある狭い水路だけでしたので、低湿地はしばしば洪水に見舞われていました。そこで、5世紀の仁徳天皇^{にんとく}の時代に上町台地に大がかりな放水路が開かれ、平野部にもある程度安定した土地が生みだされました。この放水路（難波堀江^{なにわのぼりえ}）が現在の大川であるとされています。

こうした土木工事は、大陸や朝鮮半島の進んだ技術の助けを借りて行われたと思われませんが、上

町台地東側の東成の地はこうした人々の拠点であり、日本で最も進んだ文化・技術交流の先進地帯であったのです。東小橋3丁目の比売許曾神社の祭神が新羅の王子の妻であったとされる下照比売(姫)命であることも、当時のこの地域に朝鮮半島からの渡来人が多く集まっていたことを物語っているのではないのでしょうか。

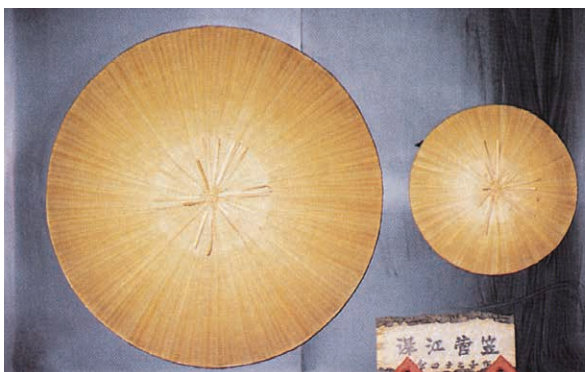
上町台地とその東と西に広がった土地は古くは難波と呼ばれ、東部を難波大郡、西部を難波小郡と称されていましたが、奈良時代の和銅6年(713年)の新しい郡郷の制度により、難波大郡が東生郡に、難波小郡が西成郡に改められ、このとき以来東生(東成)の地名が現在まで続くことになります。

中世・近世

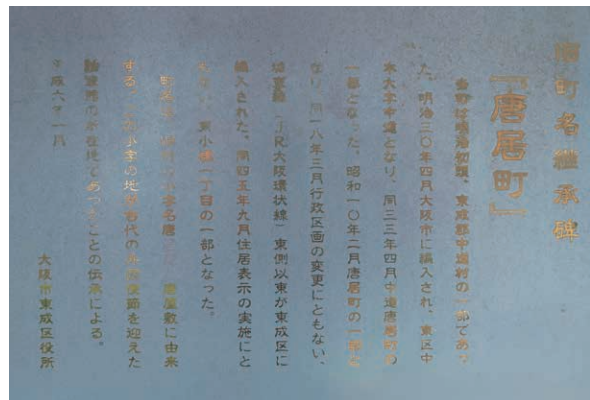
今からおよそ1,200年前、延暦13年(794年)都が京都に移されてからは、日本と大陸との交流も少なくなり、従って大陸への玄関口としての難波東成が歴史の舞台に華々しく登場することもなくなりました。

しかし、この地が瀬戸内地方と京都・奈良・紀州などを結ぶ交通の大事な場所であり、古くからの様々な文化や技術が積み重ねられてきた場所であることに変わりはありません。東に広がる低湿地の開拓は次々と進み、南北朝時代には現在の東成区域の大半が、「新開荘」として四天王寺の寺領に組み入れられるほどでした。

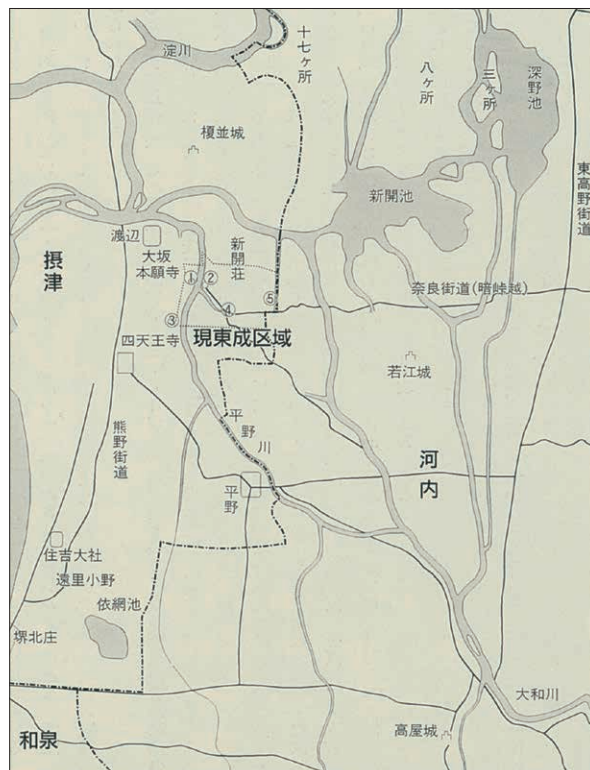
また、深江には古代に大和笠縫邑から移り住んだという笠縫氏がおり、代々の伊勢神宮や天皇家



深江菅笠



旧町名継承碑(東小橋1丁目19-20歩道)



中世の大坂平野(河川などは近世初期の状態を参考に描いたもの。①中道 ②本庄 ③木村 ④今里 ⑤深江)

の大事な儀式に用いる菅笠、円座や翳(柄のついた日除け)を調達するほか、一般用にも座(組合)を結成して奈良・京都を中心とする畿内一円に専売権を獲得していました。

桃山時代の豊臣秀吉の時代に新開荘の荘名が廃止されますが、江戸時代になると東成区域は深江村を除き大今里・東今里・西今里・本庄・中道・

木野などの村々は大阪城代の松平領となり、後に幕府の直轄領またはそれに準ずる扱いを受けることになりました。東成の地は大阪城の東を固め、米・麦・綿・菜種などの豊かな農産物を産し、平野川を通じて河内方面との水運に恵まれるほか、くら物ごえならかいどう暗越奈良街道の出発点として大勢の人々が行き交い賑わいました。

近現代

やがて明治になると、大阪府が誕生し、明治4年（1871年）廃藩置県によって当区内の11の村々は新しい土地制度の下に置かれ、明治22年（1889年）に市制町村制が施行され、大阪市東西南北の4区とともに、改めて大阪府「東成郡」が設置されました。

その後、大正14年（1925年）大阪市第2次市域拡張により、大阪府東成郡の大半が正式に大阪市に編入され「東成区」が発足しました。

この時の東成区は、なかもと つるはし なまず え なみ中本・鶴橋・鯉江・榎並の4町とかみじ しやうじ いくの じやうとう えのもと しるまた ふる神路・小路・生野・城東・榎本・城北・古市・清水の8村で編成され、上町台地の東側の大半を占める広大な面積を持っていました。そのため区役所も旧鶴橋町役場の本庁の他、いまふく せんぼやし今福と千林にも出張所を置かなければなりませんでした。

また、近代化が進んだ明治・大正時代には、東成区周辺に多くの製造工場が創業しました。ボタン、はき物などの日用品から、染織、ガラス製品、機械製造、金属加工など。その中には、当時、新



登録有形文化財の大阪セルロイド会館



暗越奈良街道 看板

（大今里3丁目14番歩道）

東成区内には石碑や道標があり、また看板のそばには堺屋太一氏による解説などがある。



東成郡役所



創設当時の東成区役所

しいプラスチック素材だったセルロイドの製造工場もあり、「モノづくり」の町「ひがしなり」が形成されていきました。

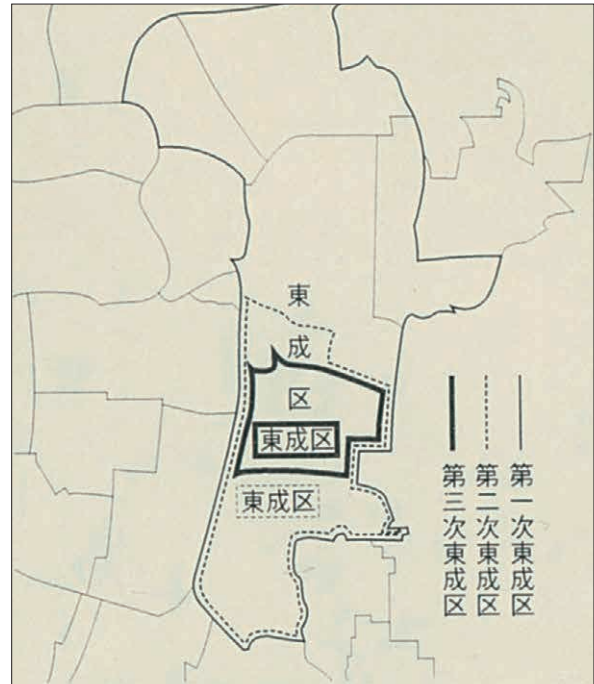
昭和に入ると都市化が進み人口も増えてきたので、7年（1932年）に旭区、18年（1943年）に生野区・城東区が分区して現在の東成区の規模に至ります。また、現在の東大阪市東部と東成区付近を結ぶ産業道路が開通します。交通の利便性を活かして、生駒山に位置する枚岡地区で盛んだった金属加工（伸線業）工場と連携した工場が増加しました。一方、戦時中は軍需工場である「大阪砲兵工廠」が森ノ宮に設立され、東成区を含む周辺地域では、鉄鋼、金属加工、化学などの技術

開発や職工の育成が進み、大阪市東部に機械工作関係の工場が集積していきました。

戦後の経済成長とともに、東成区では食品、衣料、繊維製品、化学、印刷などが盛んになり、製造業の町として発展しました。現在では、長引く不況や、海外との価格競争といった時代を迎えている中、IT、デザイン、福祉、環境などを切り口としたモノづくりにも取り組んでいます。これからも東成区の町工場は、その高い技術と志によって独自の発展を続けていくことでしょう。

令和7年に東成区100周年を迎えました。

わが東成は大阪東部で最も古くから開けた土地として、1,300年の間、名を伝えているのです。



東成区域変遷



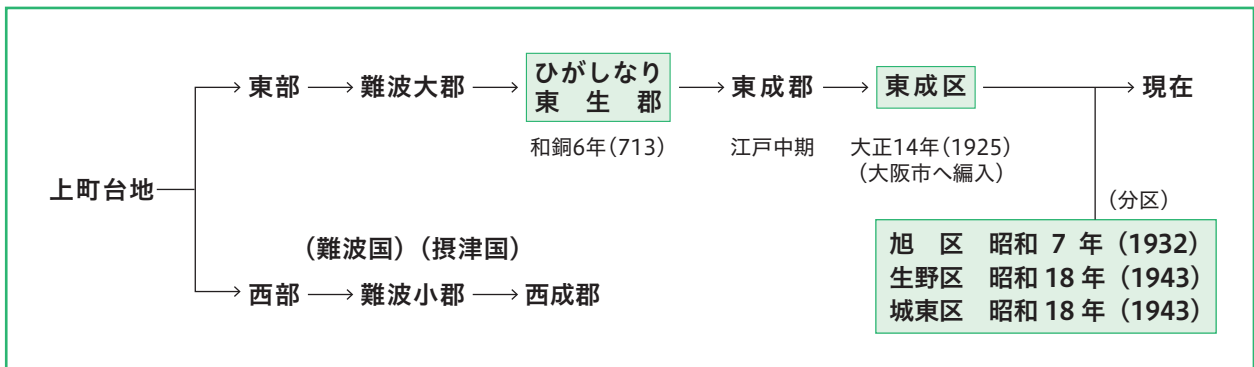
昭和5年建設の旧東成区役所



現在の東成区役所



100周年を記念し区役所前の外灯に設置されたのぼり



写真で振り返る東成区

過去100年間の写真集

今里ロータリー



昭和10年頃の完成間もないロータリー



昭和26年頃、中心部の緑化が進むロータリー



昭和30年頃、解体工事が進むロータリー



昭和31年頃、解体終了し交差点が機能するロータリー（遠くに大阪城を望む）



昭和44年頃、地下鉄谷町九丁目～今里が開通（左側、駅出入口設置）



令和7年、現在のロータリー



中央大通り



昭和30年代の緑橋交差点付近（右中、東中本小学校）



昭和40年代の森ノ宮付近（上部高架JR森ノ宮駅）



昭和40年代の疎開道路と中央大通りの交差点付近

区内の河川



昭和20年代の平野川

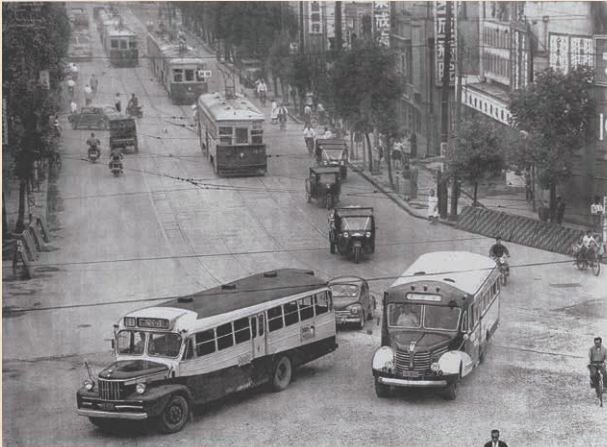


昭和30年代の区内西部を流っていた猫間川



区内北部を流っていた千間川（年代不詳）（遠くに大阪城）

区内を走行していた市電



昭和30年代の今里ロータリー付近



昭和30年代の長堀通り付近



昭和30年代の長堀通り付近



昭和40年代の剣橋付近



昭和40年代の千日前通り



昭和40年代の現区民センター前付近

その他（浸水）



昭和5年頃 旧東成区役所庁舎前



昭和32年頃 今里ロータリー付近



昭和32年頃 今里新橋通商店街付近

